

上海の変貌

思い起こせば、故郷の上海を離れ日本にやってきたのは、12年前のことであった。その後、欠かさず年に1回の帰郷をしているが、そのたびに、上海の変貌ぶりに驚かされた。今回は現在の上海の諸事情についてお話をするが、その前に予備知識として、簡単な上海の歴史に触れておこう。

上海の歴史 上海は古来、辺境の地とされてきたが、その都市としての歴史の始まりは南宋代の1267年、「上海鎮」の設置であったとされる。さらに元代の1296年に「上海県」に昇格され、明代に入ると、中国最大の綿紡績の中心となり、商業が発展していった。清代に入ると、上海は海運都市として名を馳せ、1685年に税関が置かれた。しかしアヘン戦争に敗れた清朝政府は1842年、西欧列強から上海をはじめとする5港を通商港として開港するように強制された。さらに、1845年にイギリスが初めて上海で租界を設立し、続いて米仏も租界を設立したのである。租界では欧米列強が、軍事力を背景に清朝政府に黙認させる形で、植民地として事実上の支配権を得ていた。このように1842年以降の100年余りの間、上海は中国において外国人による商品ダンピング、原料・金銭財産の略奪の主要港となり、これにより上海は「冒険家のパラダイス」、「世界の魔窟」などと呼ばれていたが、後の中国最大の経済都市へと発展していく礎もこの間で形成されたといえよう。中華人民共和国建国後の1958年に、上海は中央政府の直轄市となった。

今日の上海 1934年に開業した24階建て、高さ83.8mの上海国際飯店は、私の記憶の中で最も印象深い上海の建物である。なぜならば、幼い頃から上海一の高いビルとして飽きるほど聞かされ続けてきたからである。しかし今日、上海だけで100mを超える超高層ビルがすでに2000棟以上あるとされ、この数は日本の超高層ビルの総数をも上回るものなのである。このうち、有名な東方明

珠タワーの直ぐ隣にある地上88階、地下3階建て、高さ420.5mにもものぼる「金茂大厦」（金茂ビル）の高さは、中国一、さらに世界第四位を誇っている。かつて上海一の高さを誇った国際飯店は2000位以下になってしまった。その一方、旧市街の超高層ビル群の足もとには、下町の粗末な家屋が点在している。これはまだ発展途上の証しであると見るべきであろうが、私の目には上海が未来都市としての一面と、なじみのある昔ながらの一面とが混じり合っているという、奇妙な光景であるように映る。

私の生活していた頃の上海の交通事情はとてひどいものであった。家路を急ぐ人々が溢れ出して、ドアを閉められず、発車できなくなっているバスを見るのが、日常茶飯事であった。交通事情があまりにもひどく、父はバス通勤を諦め、毎日1時間40分以上をかけて自転車通勤を15年以上もしていたのである。しかし、1990年以降、急ピッチで進められているインフラ整備によって、上海の交通事情が一変した。まず地下鉄、モノレールなどの開通によって、通勤時間が保証できるようになった。また内環高架路（環状高速道路）をはじめ、立体幹線道路が次々と開通され、渋滞緩和に功を奏しつつある。さらに黄浦江という川に分断される上海の浦西（旧市街地区）と浦東（開発区）地区が、南浦大橋・楊浦大橋・徐浦大橋・盧浦大橋などの完成によって結ばれた。昔、渡し船を頼って行き来した市民たちにとっては、その便利さは歴然たるものである。とくに、南浦大橋など3つの大橋のすべてはワイヤー吊り橋であるのに比べ、盧浦大橋は、5年後に開催予定の上海万博を意識し、景観性と耐用性が重視されて建設された全長550mにも及ぶ世界最長の鋼アーチ橋である。

世界で初めて商業用営業路線としてのリニアモーターカーが上海で2003年に正式開業した。浦東国際新空港と市内を結ぶ約30kmの距離を最高時速430km、わずか7分で走る。しかし、片道の運賃が50元（約800円）で、平均月収約3万円弱の一般市民にとっては、決して手頃の価格とはいえ

ない。

2004年9月のF1グランプリ開催は、現在の上海における車保有率からすれば、無謀とも思われるが、その100～2000米ドルにもなる観戦チケットの値段設定から考えると、明らかに一般の上海市民ではなく海外からの愛好者をおもなターゲットにしている。さらにその経済波及効果からすれば、計り知れない効果があると専門家は指摘する。しかも私は、上海F1グランプリ開催が上海のマイカーブームに拍車をかけると考える。

勿論上海の日進月歩の変貌は、市民生活に深く関わるあらゆる分野にも感じ取ることができる。

中国茶飲料として、日本では幅広い支持を集めている烏龍茶だが、実際、これは福建省の人々に親しまれるものではあるものの、かつて上海ではまったく知られていないものであった。1996年、上海に帰郷していた私は地下鉄の駅に設置されている当時まだ珍しかった自動販売機にセットされているペットボトルの烏龍茶を目にした。意外に思った私をさらに驚かしたのは、それが中国メーカーのブランドではなく、日本メーカーのサントリーからの逆輸入品なのである。如今、上海でも烏龍茶が大衆的飲料として定着しつつある。

市民の足として長年親しまれてきた路線バスにも、大きな変化が現れた。1995年以降登場した空調車（冷暖房車）がその主役を担う。運賃は従来のバスの2倍になるものの、その冷暖房効果が好まれ、夏、冬場を中心に利用者が急増した。その結果、参入した当初、運行していたバスの全体に占める割合が3割以下の空調車は、現在9割に近いとされ、むしろ冷暖房のないバスを探すのが難しいという。しかも、従来国営企業が独占してきた路線バス事業には、大幅な規制緩和により民間企業の参入が可能となり、事業全体のサービスの向上が促進された。乗車してみると、最も私を驚かせたのが、サービスの向上の一環として車内の2か所に設置されている液晶テレビである。寡聞ながら、私はいまだに日本でテレビつきの路線バスを見たことがない。

また、私がいた頃の上海では24時間営業してい

た店がほとんどなかったが、上海の24時間営業のコンビニ業界に先駆けたのは、日本のコンビニ大手のローソンである。1996年2月に上海華聯羅森有限公司（上海華聯ローソン株式会社）が発足、同年7月に第1号店として古北新区店が開業した。その後銀行のATMの設置を始め、日本のコンビニとほとんど同じサービス内容を次々と上海市民に提供し始める。しかも2002年12月から、日本に先駆けて菓の自動販売機を設置し始めた。それだけではない、羅森（ローソン）に足を運んだ私を驚かせたのがレジの横に置かれているおでんであった。さらに羅森の独占状態を打破しようと、中国企業の新規参入が相次ぎ、活気の溢れる業界になりつつある。24時間営業のコンビニの登場が、上海市民にとっては、生活の利便性を飛躍的に高めたものであるに違いない。

雑多ではあるが、以上のように、私の視点から見た上海の変化について触れたが、最後に、近年の著しい発展を裏づけるものとして、上海の経済統計データから見てみたい。下表は、1999～2004年の上海市総GDPと1人当たりのGDPを示している。（上海市統計局のデータをもとに私が作成したものである。ただし、2004年のデータは速報値である。為替レート：1米ドル＝8.27元）

年	上海市総GDP	1人当たりのGDP
1999	487.90億米ドル	3725米ドル
2000	550.32億米ドル	4177米ドル
2001	598.65億米ドル	4520米ドル
2002	654.02億米ドル	4915米ドル
2003	755.84億米ドル	5649米ドル
2004	900.88億米ドル	6687米ドル

これによれば、上海の1人当たりのGDPは、2000年に初めて4000米ドル台にのり、その3年後の2003年には5000米ドルの大台を突破した。これは2003年中国全国の1人当たりのGDPの1090米ドルの5.2倍にもあたる高い数値である。さらに2004年の速報値を見る限り、すでに6687米ドルに達し、7000米ドルの大台に迫る勢いである。これらのデータが、急成長する上海経済を如実に物語っている。（財）守屋留学生交流協会第20回奨学生 程正

財団法人「守屋留学生交流協会」は、1982年元帝国会社社長守屋紀美雄氏の株式の寄付によって設立、アジアからの留学生に奨学金を給付している。奨学生は現在までに18か国・地域231名。